第７回アジア太平洋学際的会計研究学会（APIRA）大会記

篠原　阿紀（桜美林大学）
天王寺谷　達将（広島経済大学）

第7回アジア太平洋学際的会計研究学会（The Seventh Asia Pacific Interdisciplinary Research in Accounting Conference：APIRA）は，2013年7月25日から28日にかけて神戸国際会議場において，國部克彦氏（神戸大学）を組織委員長として開催された。本学会は，*Accounting, Auditing and Accountability Journal（AAAJ）*誌との共催で，アジア太平洋地域で3年に１度開催されている。*第2回大会が大阪で開催されて以降，今回が2度目の日本での開催である。*今大会は世界31カ国から317名が参加した。大阪で開催された第2回大会の参加者が133名であったことを考えると，参加者数も大幅に増え，大変な盛会となった。

大会は4日間の日程で行われた。大会初日は，大学院生や大学に職を得て5年以内の若手研究者を対象としたEmerging Scholars Colloquiumが開催された。これには，世界12カ国から47名の若手研究者が参加し，彼らの研究発表に対して14名の世界的な研究者たちが熱心な指導を行った。

大会2日目は國部克彦氏，水谷文俊氏（神戸大学），Lee D. Parker氏（*AAAJ*誌編集長）によるオープニング・セッションで幕を開けた。続いて，藤本隆宏氏（東京大学），David J. Cooper氏（University of Alberta）のプレナリー・セッションが行われた。藤本隆宏氏は，「A Design-Based View of Manufacturing and Accounting」と題し，設計論に基づいた概念から原価計算の再解釈を試み，設計情報の媒体占有時間を鍵概念とした「全部直接原価計算」の可能性を指摘した。この設計に基づいた概念によると，競争優位性とは，製造についての組織能力および製品・工程のアーキテクチャー間の適合によって生み出されるものであり，そこでは「良い設計情報の良い流れ」を生み出すことが重要となる。また，David J. Cooper氏は，「Accounting and Globalization」と題し，国際的な会計規制および業績評価システムの普及という2つの分野のレビューを通じて，会計とグローバリゼーションの関係性を，グローバロニー（globaloney），グローカリゼーション（glocalization），グローバリズム（globalism）の3つの異なる概念から探求した研究報告を行った。次に，パラレル・セッションが行われた。社会環境会計，公会計，NGO会計，財務会計，会計とガバナンス，管理会計，学際・批判会計，監査，会計と災害，会計史に分かれて合計46本の発表が行われた。各セッションは１報告当たり30分に設定され，司会，報告者，コメンテーターに分かれ，報告者が15分報告した後，コメンテーターが報告内容について5分コメントし，残りの10分で討論が行われた。すべてのセッションが英語で行われたが，どれも討論が10分では足りないほど活発に議論が行われていた。

大会3日目は，Jeffrey Unerman氏（Royal Holloway, University of London），Liyan Wang氏（Peking University）のプレナリー・セッションが行われた。Jeffrey Unerman氏は，「Whither Theory in Social and Environmental Accounting Research」と題し，社会環境会計研究における理論の役割と，いかにそれが社会

環境会計の研究者に対し深い洞察を与えるものであるかについて報告した。また，Liyan Wang氏は,「Sustainability and Social Responsibility Reports: Generating Valuable Information, or Not」と題し，サステナビリティ報告書の情報の有効性と信頼性について，中国の動向を踏まえて検討し，情報の標準化と第三者による検証について論じた。また，Jane Broadbent氏（Royal Holloway, University of London）とRichard Laughlin氏（King's College London）による新著の刊行を記念して，若手研究者のための賞が新たに創設され，Luis Emilio Cuenca Botey氏とLaure Celerier氏の研究「Participatory Budgeting: A Bourdieusian interpretation」が受賞した。この他に，パラレル・セッションが行われた。社会環境会計，会計とガバナンス，公会計，学際・批判会計，管理会計，財務会計，監査，会計史，会計と教育，会計とリスクマネジメント，会計情報と管理会計，に分かれて合計86本の発表が行われた。

大会4日目は，Garry Carnegie氏（RMIT University），佐々木郁子氏（東北学院大学）のプレナリー・セッションが行われた。Garry Carnegie氏は,「Historiography for Accounting: Methodological Contributions, Contributors and Thought Patterns: 1983 to 2012」と題し，1983年から2012年の30年間にわたる会計歴史学の61の研究をレビューし，これまで研究されてきたテーマ，会計研究に貢献してきた著者および出版媒体，引用件数の多い会計研究について分析結果を示した。佐々木郁子氏は,「Restructuring Process and the Role of Accounting System after the Devastating Tsunami」と題し，東日本大震災によって甚大な被害を受けた東洋刃物株式会社の事例を通して，東日本大震災からの復興とそれに対する会計の役割について論じた。特に,「会計は人命を救えないが，生きのびた人々の状況を立て直す可能性を有している。会計情報および会計システムは正常化を促すものである」という主張は，参加した会計研究者の心に深く刻まれたであろう。また，パラレル・セッションが行われ，社会環境会計，公会計，NGO会計，会計とガバナンス，管理会計，学際・批判会計，知的資本とリスクマネジメント，財務会計，監査，会計史，に分かれて合計71本の発表が行われた。そして，最後に神戸ポートピアホテル「大和田の間」にてバンケットが開かれた。神戸大学邦楽部が演奏する中で参加者が着席し，組織委員長の國部克彦氏の挨拶，プレナリー・セッションの講演者らによる鏡割りから始まり，OSKのショーが参加者を魅了し，Lee D. Parker氏とJames Gathrie氏による挨拶，組織委員会へのお礼，次回のAPIRA2016の紹介がなされ，本大会は幕を閉じた。